

# 探究活動についてのアンケート報告 2021

日本理化学協会 顧問 菊池 正仁

## 序章 探究活動の状況について

現場の先生方には大変ご迷惑をおかけしましたが、今年は全国すべての支部より 424 名の先生からご意見をいただきました。

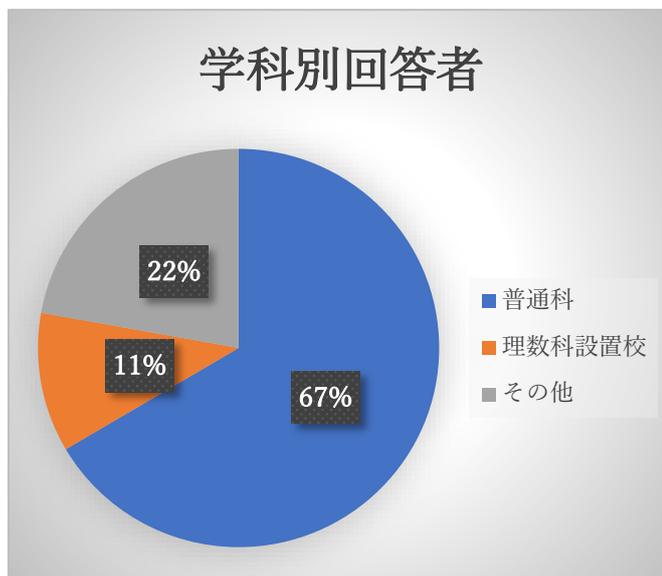
回答していただいた先生方の学科別の分布は右のようになり、普通科 282 名、理数科設置校 48 名、その他 94 名でした。学校数に整理しなおすと、全回答校は 345 校で、普通科 225 校、理数科設置校 37 校、その他 83 校でした。

令和 4 年度からの新学習指導要領の本格実施を踏まえ、大きな課題として探究活動をどのように展開していくのかという点が大きなテーマであると考えました。平成 21 年告示の新学習指導要領では「理科課題研究」が選択科目として理科に置かれていましたが、設置は数パーセントに留まりました。しかし、学校設置科目や総合的な学習の時間などを活用した探究学習はこの数年確実に増え、本会の調査でも平成末には全校の約 1/4 程度の学校が取り組みを行っていました。

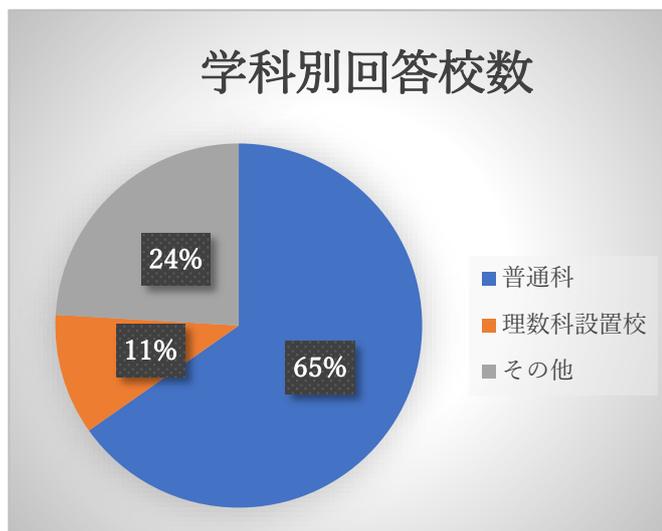
昨年お願いした調査でも、調査した 233 校についての取り組みを調べてみると(複数回答可)、約 1/3 の学校が探究活動に取り組んでいることがわかりました。

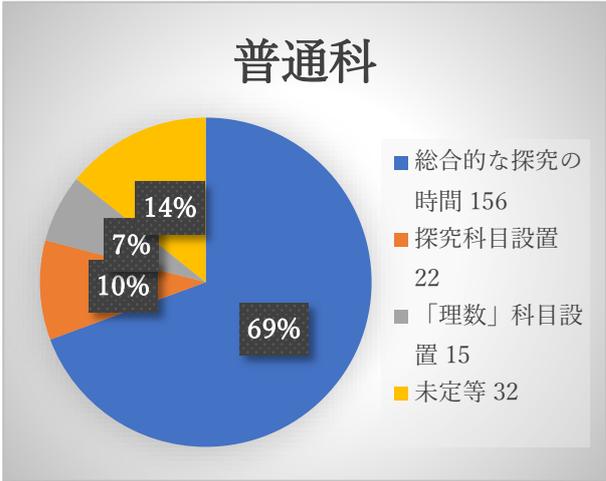
今年のアンケートについては、まず、来年度からの具体的な取り組みについてお答えいただいた内容を学科別に整理して序章として以下に報告いたします。

### 学科別回答者



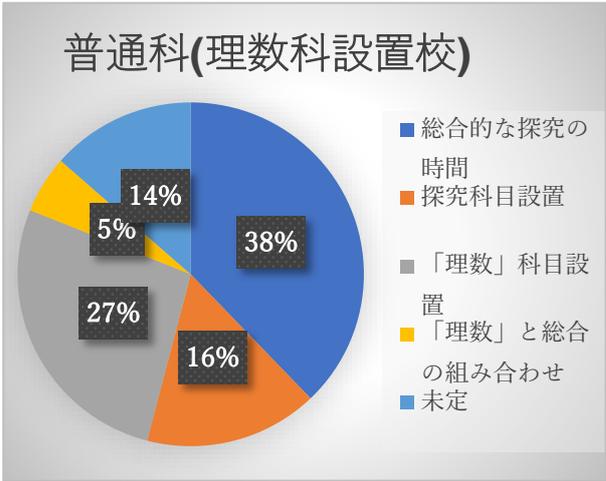
### 学科別回答校数



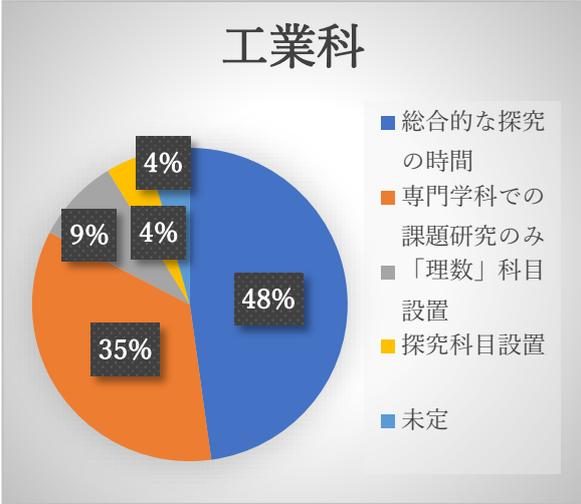
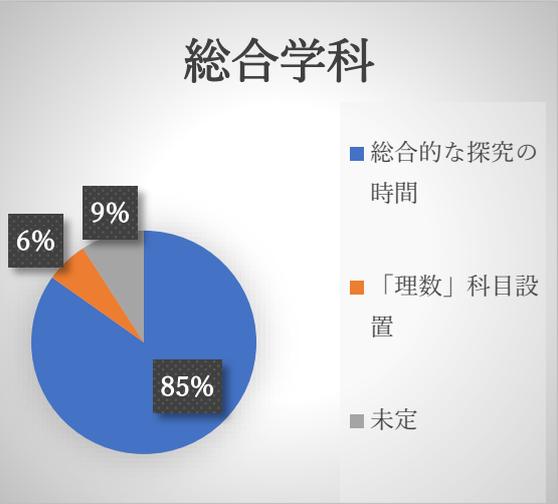


普通科では、昨年の調査に比べて総合的な探究の時間で探究活動を実施するという学校が増えており、選択教科「理数」の設置は7%に留まっていますが、学校設定科目としての探究科目を合わせると17%となります。

一方、理数科設置校の普通科での探究活動では、かなりの学校で「理数」またはそれと同等の学校設定探究科目を設置していることがわかります。



また、総合学科ではほとんどの学校が総合的な探究の時間(28/33校)、工業科では専門教科での取り組みのみ8校、総合的な探究の時間11校、「理数」設置校2校、学校設定科目としての探究教科の設置1校でした(全23校、うち未定1)。特別支援学校では11校中7校が総合的な探究の時間、等の結果でした。ただし、どの学科でも必ず「理数」を設置している学校が見られたことは注目されます。



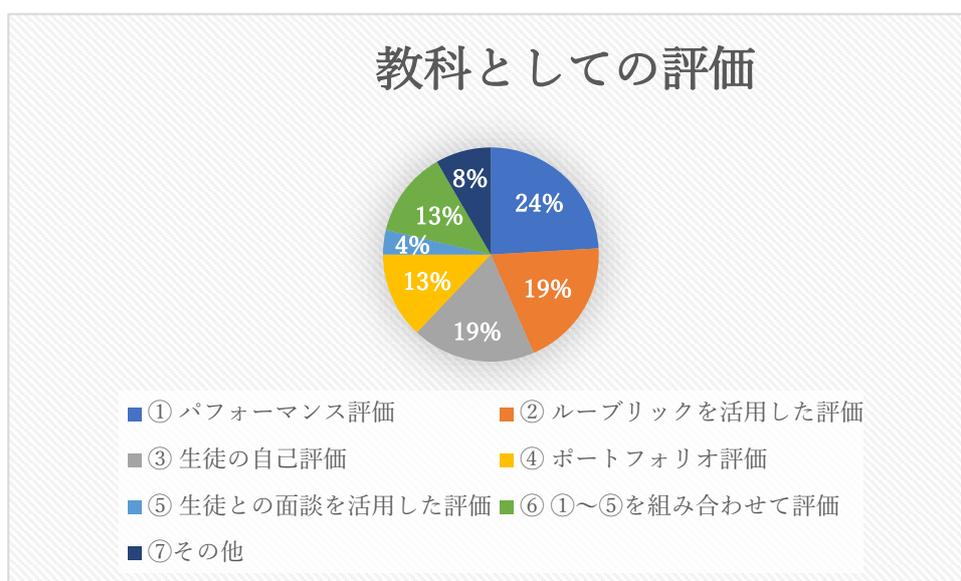
全体としては、令和4年度の実施に関しては、教科・科目としての取り組みが減少し、総合的な探究としての取り組みが増えてきているという点と、全体としての探究教育への取り組みについて実施形態は色々ですが確実に増加しており、先生方の意欲は確実に高まっていると強く感じました。

## 第一章 具体的な取り組みの現状

調査は、来年度からの具体的な取り組みについては未定も含めかなり色々な状況があるため、序章で報告させていただいた概況調査とし、今年度を実施している探究活動について詳しく質問し、実際に今年度実施されている内容を分析しました。序章でも報告しましたように、来年度からの予定では総合的な探究としての設定が増えるなどの変化はあるものの、探究活動への考え方は大きくは変化していないと考えてそのようにさせていただきました。

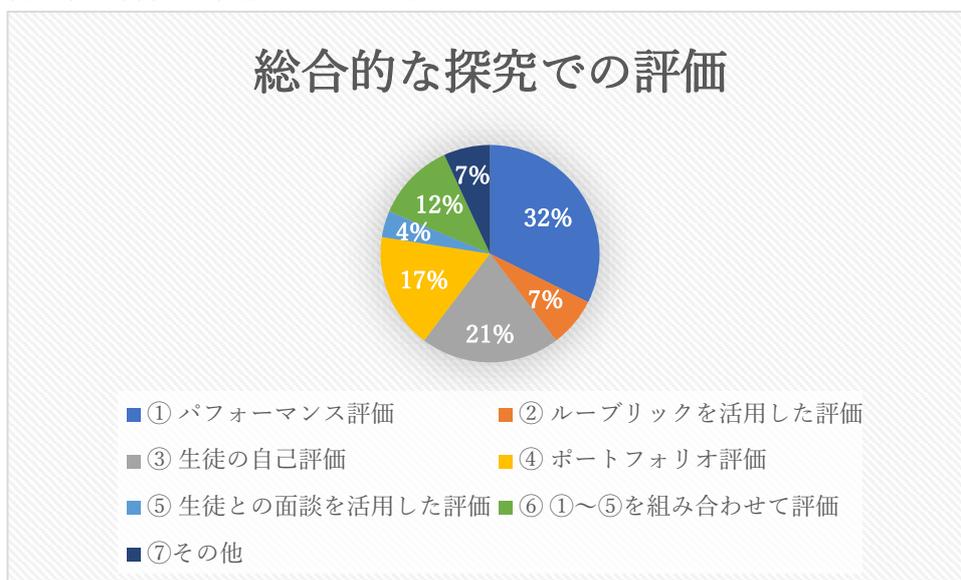
### 1. 評価の現状

普通科の中で教科として取り組んでいる場合の評価の方法



教科として現在取り組んでいる普通科41校について評価法を調べた結果が左図です。この傾向は、理数科のある普通科33校の普通科での探究活

動についてもほとんど同じでした。パフォーマンス評価、ルーブリックを活用した評価、生徒の自己評価が中心となっていました。



一方で、総合的な探究で課題研究を実施している118校では、文章表現で評価を示すということも影響しているのか、ルーブリック

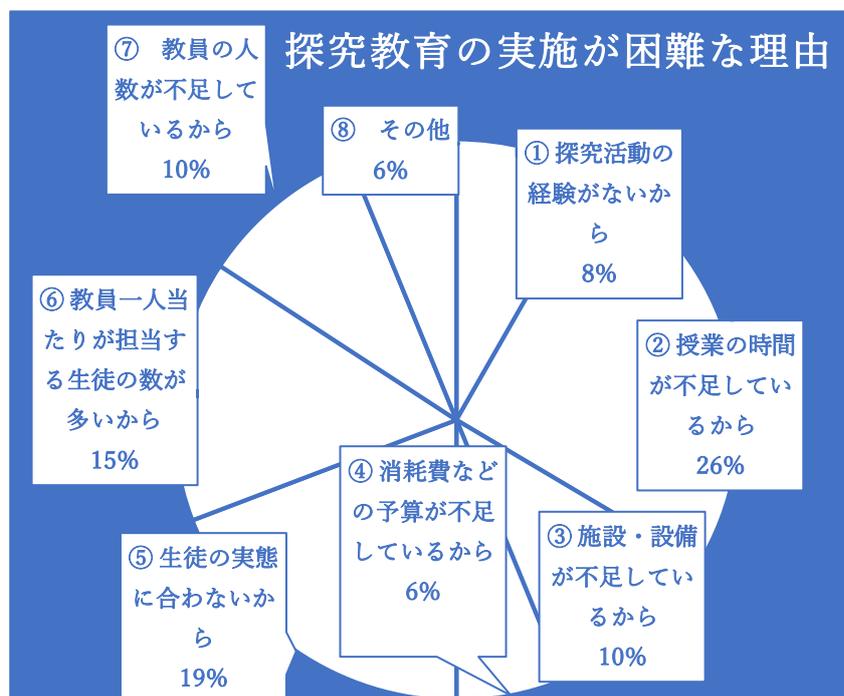
の活用が減り、パフォーマンス評価、生徒の自己評価、ポートフォリオ評価で評価する学校が多いという結果でした。全体として教科・科目として探究活動を実施する場合も総合的な探究として実施する場合も、評価については色々な方法が工夫・活用されていると思われます。

## 2. 探究グループづくりの現状

また、一方で課題研究のグループづくりに関しては、教科として実施されている場合には41%の学校が9人以下のグループで実施しているのに対して、総合的な探究として実施されている場合では、82%の学校が10人以上の大人数のグループで実施しています。このことは現実の課題として、総合的な探究で実施した場合には十分な指導の時間と指導する体制が取りにくいという多くの先生の意見を反映しているともいえます。

	科目として実施している 場合の班構成人数	総合的な探究として実施してい る場合の班構成人数
実施幅(平均)	10~17人程度	17~26人程度
理想とする人数(平均)	11	7
9人以下で実施してい る学校	105校中43校	202校中36校
	41%	18%

この項目の調査以前の予想では、現実の実施幅はこのように比較的大きな集団での指導という結果を予想していたのですが、理想の人数としてはもっと少数になると予想していました。実際には、比較的大きな集団でよいという学校が少なくありませんでした。一つ一つの学校に注目してみると、4-6人程度を理想とする学校群と20-40人程度でよいという学校群に分かれてしまい、平均だとかなり多い人数での指導でよいという結果になりました。



後半の学校群については必ずしも先生方の思いを反映しているということではなく、少人数のグループで実施したくても指導する先生や授業の時間が足りないというような学校の状況を反映した結果ではないかとも考えられます。

## 3. 探究教育を実施することが困難な理由

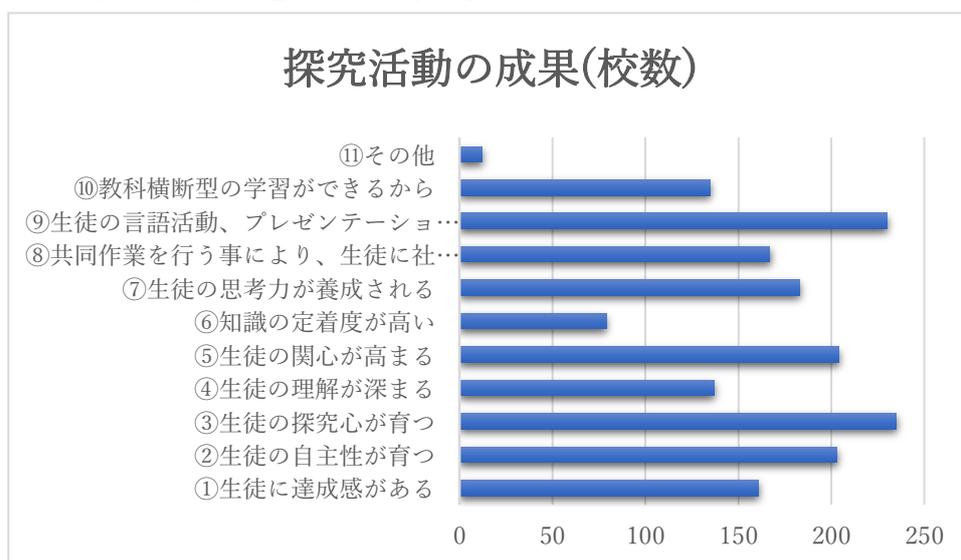
左図は実施が難しい理由として挙げられて

いる項目です。それぞれの学校の状況が異なっており、なかなか分析は難しいですが、②・⑥・⑦の項目のように、指導者不足と全体の教育課程の中で時間割の中に入れることが大変といった理由が大きいと考えられます。一方では気になる項目があります。それは具体的な意見としてもかなり出ている「生徒の実態に合わないから」という項目です。具体的には、①進学校だから難しい。②生徒の学力に課題があるから難しい。という趣旨の意見なのです。このような意見は去年よりは少なくなりましたが、依然として根強くあるというのが事実です。個人的には、そのような状況の中でも探究活動を実施する方策はあると思うのです。生徒を信頼し、その変貌を期待していただきたいと思うのですが、現実には大きな課題であることは間違いありません。

## 第二章 探究活動への道～夢と意欲を持って探究活動を～

### 1. 先生方が探究活動の成果と感じておられること

先生方が実感している成果は下表のとおりです。「達成感や自主性・探究心・思考力・社会性などが育つ、関心が高まる、言語能力・Presentation能力が育成される」という人材育成という観点からみると素晴らしいと思える意見が多い一方で、知識の定着度や理解についての評価は比較的低い水準にあります。

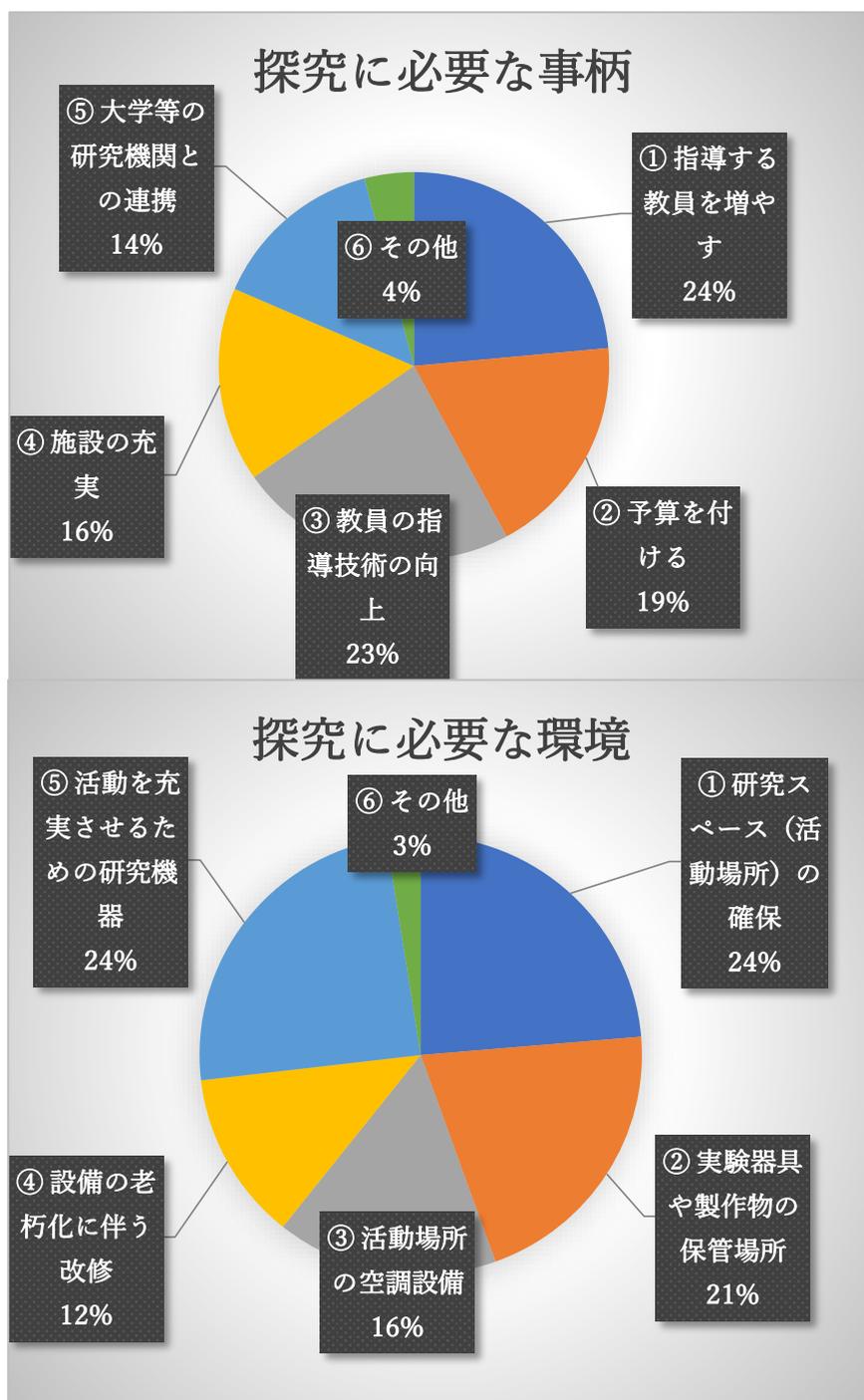


この結果は、従来からの受験のためには探究活動はあまり役に立たないという認識に通じるものではないかと思われま

す。「結果と

して、効率的に知識を定着させるにはクラス単位の一斉授業が効率的であるが、生徒を人材として育てるといふ点からは探究活動が優れている」ということを示しているのではないのでしょうか。これらの観点を整理すると、「大学受験という高校にとっては大きな課題に突き当たる。人材育成の観点は重視したいが、一方で大学入試という生徒にとって大きな関門を突破させなくてはならないという使命がある。」このバランスをどう克服していくかは、高校のみならず大学などの高等教育機関を含めて考える必要のある大きな問題であると思われま

## 2. 探究活動への諸条件の整備について



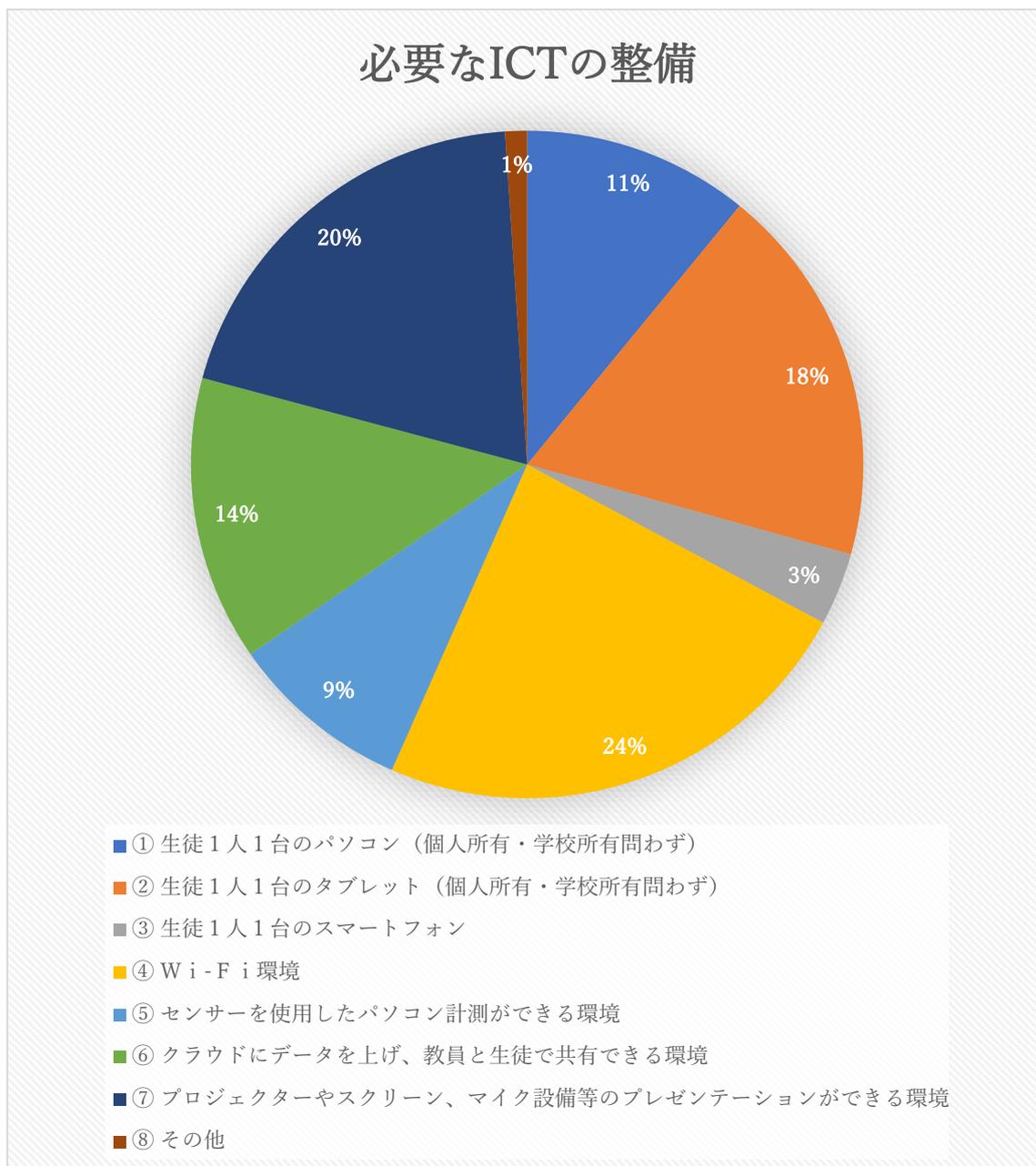
探究学習を進めていくための事柄や環境についての先生方の期待をまとめると、以下のようになります。

指導教員の増員、予算を付ける、施設の充実についてはほぼ予想されたことでしたが、教員の指導技術の向上、大学等の研究機関との連携等、先生方自身のスキルアップへの意欲が非常に強いという結果については感激しました。探究活動への先生方の積極的かつ現実的な意欲が示されていると感じました。環境の整備についてもほぼ予想されたところですが、実験器具や制作物の保管場所というのがこのように多いという現状には少し驚きました。いくつかの学校で廊下や空きロッカーなどを活用

しているという話を聞きましたが、なぜそうしているのかがよくわかりました。また、研究スペースの確保も工夫が必要だと感じました。空き教室の活用という話も聞きました。設備の改修や空調の設備など、これに関連しているようです。

いずれにしても施設・設備・研究機器についてはより充実させていくことが必要な現状であります。

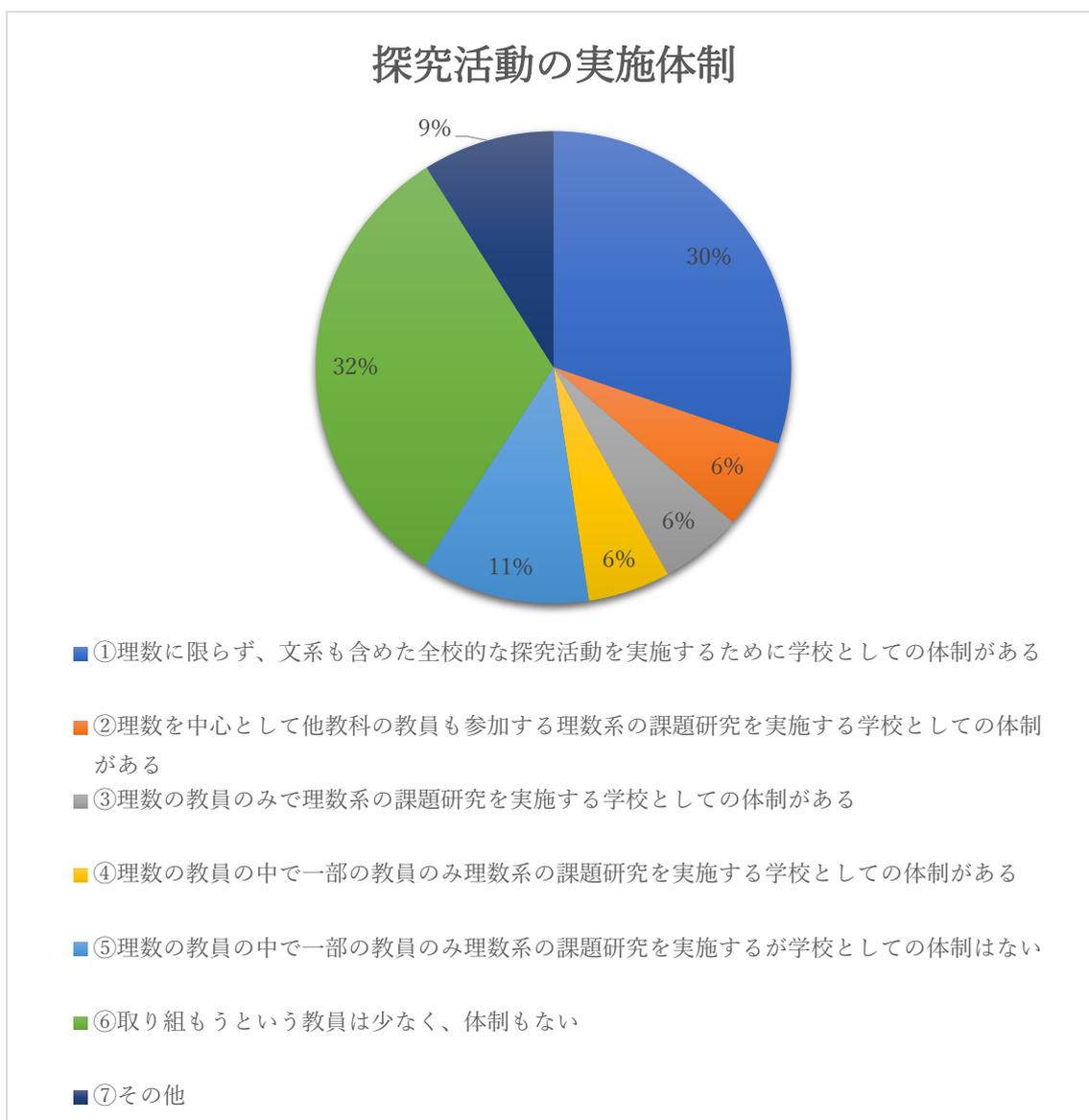
ICT については、コロナという状況も踏まえて全国的にその活用が進んでいるという状況を反映した積極的な回答がありました。先生方の希望は生徒一人一人にタブレットが配布されるということと、学校での Wi-fi 環境が必要であるという意見に集約されているように感じました。ギガ計画のような大きな後押しもあります。また、校内での cloud の活用などが進められています。探究活動の中での指導者と生徒のコミュニケーションや、探究活動の個人記録や学校としての保管などに ICT の活用が期待されていることがよく理解できます。



### 3. 探究活動等の取り組みへの学校としての指導体制の現状

学校の体制についても、探究教育の実施状況の際に見られたような、学校群に二つの山が見られます。一方で理数に限らず、文系も含めて全校的な探究活動が実施できる体制が出来ている学校が30%もある一方で、取り組もうとする教員も少なく体制もないという学校が32%もあります。

この調査は全校対象としたので学校種による影響もなくはないですが、全体としてみると、まだまだこれから取り組む体制が必要な学校も少なくないというのが実感です。

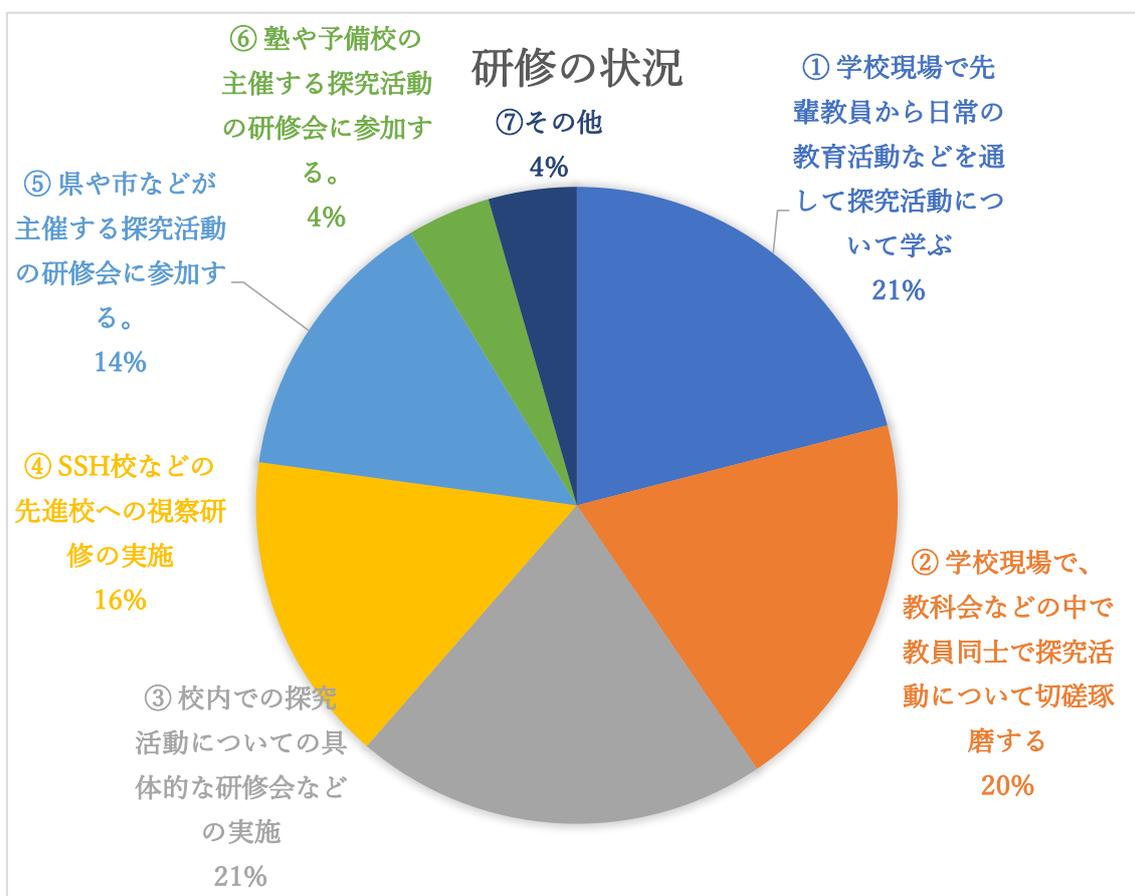


#### 4. 探究活動等に関する研修の実施状況について

研修の実態としては学校内部で実施される研修活動を中心としたものへの参加がほとんどですが、SSH校のように「外部へ発信して普及活動に努めている学校」等への視察は確実に増えてきています。

出張することの大変さなども考えると、まず校内でのお互いの授業を通しての研修を日常的に実施していける状況を確認していくことが、最も効果的な先生方の指導力を高めていくことにつながるように感じられます。また、外部講師を呼んでの校内研修も、より新しい教育手法や先端教育に触れる機会となると考えられます。そして、それぞれの学校がHP等を通してより積極的に自校の探究教育について発信していくことが、視察のみでなく他校のノウハウを取り入れていく交流に通じると思われれます。

先生方の自由意見にもあるように、大学等外部での研修の有効性を自覚し、外部研修への参加意欲の強い先生方も多いですが、校務との関連でなかなか参加できない状況があります。



### 第三章 先生方の思い

自由意見は、200名あまりの先生から寄せられました。全体として、探究活動の必要性についての肯定的な意見や探究活動を実施するにも研修が必要という意見が多かったのですが、ここではあえて意識的に少数意見も含めるようにして、39名の先生方の意見を紹介させていただきます。

掲載させていただいた先生については、ご専門の科目、ご年齢、所属校の科、クラス数及び大学進学率を書いていただきました。他にも貴重なご意見がありましたが、紙面の都合上割愛させていただきました。また、お寄せいただいた文章は何について書かれているのかを明らかにするために、「探究活動については」といった文を挿入した以外はそのままの文章を掲載しております。

基本情報	専門科目	年齢	科	クラス数	大学進学率	探究活動及び研修についての自由意見
1	化学	29歳以下	普通科	6学級以下	19%以下	探究活動をする上で研修を実施することは重要なことであるとは思いますが、その他の業務が多くある現状において、何か他の業務を減らす措置を講じてからでなければ、教師に負担をかけるばかりになり、研修の意義が薄れてしまうと思います。
2	化学	29歳以下	普通科	29~22	90%以上	これから実施していく探究活動はプレゼンテーションソフト、データ分析などでパソコンやタブレットの活用が不可欠であると考えます。探究活動の実施には、教員負担の軽減が急務だと考える。1人1人指導するためには労力が必要であるが、このままの業務に加えて探究活動が増えると教員側の負担が大きすぎる。教員の負担も含めて学校としての実施体制が確立していれば、生徒にとって大変有意義な学びになると考える。
3	化学	29歳以下	普通科	14~7	19%以下	学校により探究の取り組みはかなり異なるので、幅広く多くの学校の探究の事例を学ぶ必要がある。探究活動については、探究担当の教員と他の教員との意識の差が大きく、共通認識をもって探究を進めていく点に困難を抱えている。
4	化学	29歳以下	普通科	6学級以下	19%以下	研修は、出張となるので他の業務のことがあるので大変である。校内で講師を呼んで行う研修が盛んに行われると嬉しいと思う。生徒が行う研究に対しての専門知識を持っている先生が全くいないときが大変である。そこを外部の人の協力があるともっと盛んに探究活動を行えるのではないかと思う。

5	化学	29歳以下	普通科	6学級以下	19%以下	校内研修も多く行った方が良いと思う。探究活動は、学校の設備、教員の質に大きく左右される。金のない公立高校は後れを取り、中学生はさらに私立に流れるようになる。探究活動は格差を生む取り組みである。
6	化学	29歳以下	工業科	21~15	89~80%	研修は有効だとは思いますが、現場の教員の時間があまりにも足りておらず、参加する教員は「時間が取られる」「仕事ができない」「面倒くさい」という気持ちを抱きながら参加している人もいる。新しい取り組みを増やすなら、古い取り組みで削れるものは削らないと仕事だけがが増えていく。
7	生物	29歳以下	普通科	14~7	19%以下	意欲がある教員ほど多くの研修に参加するので、探究活動に関する能力の格差が顕著に表れている。探究活動は一部の教員の能力に頼り切っている。
8	化学	29歳以下	商業科	21~15	19%以下	非常に有益なものが多くあるが、現状の担任業務、教科指導、校務分掌、部活動指導でいっぱい、いっぱいのため、研修を受ける時間や体力があまり残っていない状況です。
9	物理	29歳以下	理数科等設置校	14~7	79~60%	探究活動の具体例を見聞することが最も重要であると考えている。また、探究活動に努めることがどれだけ自己の成長につながるか、生徒への伝え方も学びたい。探究活動では、大学、企業、地域に困りごとを相談したり、活動の舞台を提供していただいたりすることを前提として活動の幅を広げたい。
10	化学	29歳以下	普通科	21~15	90%以上	探究活動を高校に求めるのであれば、大学などの専門機関との連携が必要不可欠であるように思えるが、ひとりひとり個人の先生の力量に任せられているのが現状。高等学校の一教員が、ひとつの探究活動のテーマも考えて取り組ませるのは、負担が大きすぎる。
11	化学	30~39歳	理数科等設置校	29~22	90%以上	研修は、積極的に参加したいが、SSH校など一部の学校にしか案内がいかないイメージがある。探究活動は、筆記試験による大学入試突破にこだわっているため、学校組織として探究活動を進めるという雰囲気にならない。
12	物理	30~39歳	理数科等設置校	21~15	90%以上	校内の研修や校外の研修に参加することで、探求活動の指導技術の向上につながられると考える。一方、校務多忙化により、探求活動において重要となる生徒と関わる時間が減少している。この両立が重要である。探究活動では、昨年度より本校では、理数系の教員以外の教員も課題研究に参加するような校内体制を築いている。今後は、現在の体制のより一層の強化が求められる。
13	化学	30~39歳	普通科	21~15	90%以上	管理職から「学校として探求を充実させる」という強い働きかけがなければ、いくら研修をしても、多くの先生には自分の教科ではないおまけとしての認識でしかなく、充実は見えない。探究活動は、本校の現状を考えると、週に1回の探求活動で探求の基礎を学び、一連の流れを経験することで十分であると考えている。(大学レベルの研究の前に作法を学ぶ程度)
14	物理	30~39歳	商業科・工業科	21~15	59~40%	研修に行くたびに視野が広がり、授業改善の具体的なイメージが浮かぶ。しかし、研修は少人数のクラスであったり、探求の時間を確保してあったりと、自分の学校とは環境が異なっているので結局いつも断念している。改善のき

						っかけにはなっている。探究活動は、3年次の課題研究で商業科、情報処理科、機械科それぞれで行っている。
15	化学	30～39歳	普通科	6学級以上	19%未満	生徒の実態（生徒像）をとらえるのが一番重要であり、探究活動ありきではない。物的資源・人的資源をふまえ、現実的に可能なレベルでの研修ならば価値があるように思う。探究活動にも、さまざまなレベルがあると感じている。本校のレベルでは、「課題の把握」→「課題の探究」→「課題の解決」というすべてを体験させることは非常に難しい。一部でも実施できれば十分である。
16	化学	30～39歳	普通科	14～7	19%未満	他校への視察は非常に勉強になりますが、それを自校に持ち帰って実践しようと思っても、他の教員との意思疎通がなかなかうまくいかず、実践しにくい。探究活動については、前向きに捉えている教員の数が少ない。
17	物理	30～39歳	普通科	21～15	90%未満	コロナ禍もあって、オンラインによる講座をいくつか受講してみたが、面白いものもいくつかあった。県や市が主催するというカテゴリーに拘る必要はない気がします。探究活動については、「探究活動」を総合学習の時間で扱っていることもあるが、「教科の学習の妨げにならないよう、要求レベルを下げて欲しい」という考え方が根強く残っている。「総合学習（探究活動）」は一つの科目であり、横断的な学習となるため、通常科目よりも優先的に取り組ませるべき」という考え方が広がって欲しいと感じる。
18	化学	30～39歳	普通科	21～15	59～40%	研修で他校の先生方と交流する中で、活動の在り方や工夫などを知ることができる。研修は非常に効果的であるが、多忙な先生方に強要することが難しく、毎年参加自体が難しくなってきたように感じる。
19	物理	30～39歳	理数科等設置校	29～22	79～60%	探究活動の研修においては「事例の紹介」や「講義・講演」だけではなく、先生方が生徒役として実際に指導を体験してもらい、OJTに近い研修があった方が良く考えています。探究活動では、生徒の事を考えているからこそ、指導者の間で探究活動の是非が分かれていると感じています。
20	化学	30～39歳	総合科	14～7	19%未満	理科の教員であることから、SSH校の取り組みの視察や、理科部会での研究発表の聴講、県が主催する研修会での学び（不定期）に参加する機会があるが、全職員がこのような研修を受け、探究への意識を高めることが必要と思う。探究活動については、学校全体で取り組む仕組みが必要で、職員の意識も探究的な授業に取り組まなければならないという必然性を感じなければ、なかなか浸透していかない。

21	化学	30～39歳	総合科	21～15	19%未満	現場での工夫や取り組みを気軽に共有できる場が日常的にあるべきと思います。しかし、学校規模が小さくなり、分掌などの多忙化が進む中でそういった機会が失われつつあり、困難な現状もあります。県などが主催する研修は枠組みや方向性を示すものとして必要ですが、法定研修のように押し付けがあってはいけないと思います。また、業者の主催する研修は大変魅力あるものですが、商業的な面も多分にあり、教育に関わるお金に糸目をつけないという世の中でない限り、様々な面で難しいところがあるように思います。
22	化学	40～49歳	普通科	30学級以上	39～20%	日々の校務に追われ、研修を受けて自分のもののできる所まで落とし込むことができていない。探究活動については、探究活動の理念や意義については大いに同意するところですが、学校が多忙化する中で実りあるものとするためには人・モノ・金をしっかり教育に振り向けなければいけないと思います。
23	化学	40～49歳	理数科等設置校	21～15	90%未満	現在、様々な研修会が多く、これ以上の研修会を入れることは困難です。それゆえ、校内での情報共有の機会の増加が望ましいと考えます。探究活動については、学校間格差が大きいと思います。たとえば、小規模校では教室等の少人数分割での探究の場がなく、さらに、物品も全くありません。SSH指定校などもともと、潤沢な予算や施設がある高校では、平素の実施も容易に行うことができるとは思いますが、全校に推進するには環境、体制作りから行う必要があるのではないかと思います。
24	化学	40～49歳	理数科等設置校	14～7	90%未満	OJTが一番参考になる。講演や講話よりも具体的な探究活動の練習教材があることの方が望まれる。探究活動については、圧倒的に教員、生徒ともに時間が足りない。探究活動の目指すところは理想的だが、実際にそこまで到達することは少ない。その結果、検証や評価が極めて甘いまま自信を持って発表するという事態があちこちで生じている。このやり方を進めるとこれまでの日本の科学技術が培ってきた「正確」「正直」で国際的信頼を勝ち得てきた部分が瓦解するだろう。
25	化学	40～49歳	総合科学科設置校	21～15	90%未満	先進的な活動をしている学校への視察や他校の発表会、研修会などは大変参考となるため、積極的に参加したいと思っているが、校務との兼ね合いにより、なかなか時間的に参加できないのが現状である。探究活動については、3(6)年間の一貫した探究学習の中に既存の授業や学校行事をあてはめていき、生徒自身の主体的な活動の場としていくことが必要である。そのためには推進チームの編成や学校全体での研修や協議による目標の共有が必要である。

26	物理	40～49歳	普通科	29～22	90%未満	<p>・SSH指定校は、文系・理系の両方の探究・研究活動に関する研究開発を精力的に行っているため、SSH校での活動事例を参考にしてカリキュラム開発するのがよい。</p> <p>・SSHを実施して感じたことは、探究活動は「全校体制でうまく実施すると生徒の学力向上につながる」ということである。本校アンケート結果で、専門的な深いアドバイスができなくとも、その時間一緒に楽しんで生徒と関わった教員がいるグループの満足度が非常に高く大きな成果を出していることも示されている。(教員が生徒と関わらず、ただ教室にいて別の仕事をしているようなクラスでは、生徒の満足度が非常に低いというデータも得られている。) 探究は教員のマンパワーで行うのではなく、全校体制としてコンセンサスを取って活動しなければ、高い教育効果が得られない可能性もあるということは心に留め置く必要がある。</p>
27	化学	40～49歳	理教科等設置校	29～22	90%未満	<p>探究活動については、探究の成果が調査書に反映され、それを多くの大学がきちんと評価してくれるように広がると、もっと高等学校でも真剣に探究活動に取り組む教員が増えると考え。探究の重要性を知り取り組むのが一番であるが、保護者や地域からの学校に向けた要望を考えるとその点は無視できない。</p>
28	化学	40～49歳	普通科	21～15	90%未満	<p>働き方改革も強く推進が求められており、研修する分、何の仕事が減らすかの両面が検討されないと実践不可能の状態ではないかと考えている。探究活動については、今後、SSHの指定が外れた場合は、予算と時間の面で、実践が非常に困難になるのではないかと危惧している。</p>
29	物理	40～49歳	普通科	29～22	89～80%	<p>とにかく研修があれば参加することを心がけている。基本的に無駄になることはないかと捉えているが、学校現場が急がしいと考えている。もう少しゆとりを持って研修に参加したい。探究活動については、何をすべきか、正しいかが分からなくなってきた。しかし探究の必要性は感じている。</p>
30	化学	40～49歳	普通科	21～15	90%未満	<p>全ての教員が一律に研修を受け、探究活動を指導する方法に習熟したとしても、そのように画一化された指導の中から本当にイノベティブな考え方やものは生みだされてくるのでしょうか。探究活動については、個人的には学校内に探究活動をぜひ取り入れたいです。しかし、探究活動に評価という競争原理を持ち込んだり、探究活動の実施体制を整えたりすれば、イノベーションが起こって問題が解決する、という考えは短絡的だと思います。イノベーションとは、どうしても研究をやりたくてしょうがない人が、周りからの評価など気にすることなく、寝食を忘れて研究に没頭し続け、ある時偶然にも、誰も予想していなかったものを生み出してしまった、といったときに起こるのではないかと思います。したがって、探究活動を取り入れるのであれば、「希望してどうしても探究活動をしたい生徒に限る」「評価はしない」</p>

					「3年間で結果が出なくてもかまわない」といった余裕ある考え方が必要ではないかと思います。	
31	物理	40～49歳	普通科	29～22	90%以上	文科省がやれと言えれば何でもできるわけではない。(たとえば生徒が100m10秒で走れるような教育施策?) 教員・生徒のやる気・能力を前提にしてほしい。大学入試改革や、免許更新など、理念が先行した教育政策の挫折によく学ぶべき。
32	物理	50～59歳	工業科	21～15	19%未満	定時制課程工業科の勤務校ではこれ以上授業時間を増やすことがカリキュラム的に難しいため、必修科目を精選する必要がある。夏季休業中に集中講義的に実践することも、全定併設の勤務校では実施は困難なように思う。
33	化学	50～59歳	普通科	21～15	79～60%	研修については生徒に向けて探究の話をしてくれる講師を呼ぶなどしているときに、一緒に学んでいる。専門家に学ぶことはなにより勉強になり、また生徒を動かす方法も学ぶことができる。探究活動については、大変であると思うのは、生徒にさせようと思うとき。生徒が興味あることをしているときは、少しのアドバイスでどんどん進んでいく。結果を求めるのではなく、探究の過程を学ばせようと思うことが大事である。
34	化学	50～59歳	普通科	29～22	39～20%	自分の参加できるタイミングでの研修がなかなか実施されないため、参加できずにいる。また県外での研修への参加は、移動に伴う時間や費用の面で難しい。探究活動については、生徒が探求活動をおこなうレベルに無いため、実施するには非常に困難な状態である。生徒の自主性を重んじていると探求内容の設定すら難しいと思われる。
35	生物	50～59歳	普通科	6学級以下	19%未満	これまで、新指導要領の教科別の研修会で探求活動についての概要について話を聞いたらいいので、基本的なことから学ぶとともに、特別支援学校高等部での探究活動のあり方や実践例について情報を収集するなどの取り組みをしていかないといけないと考えている。探究活動については、生徒数や学級数が少ない「準ずる教育」の特別支援学校での探究活動の体制や教育課程、指導方法などについてわからないことが多い。
36	生物	50～59歳	普通科	29～22	90%以上	前任校でSSHを経験したので、その時から現在も、大学や専門機関と連携することによって、探究活動の指導を継続しています。また、有志で月1回程度の勉強会を行い、自己研鑽に努めています。探究活動はとても意義深いものであると思うが、残念ながら多数の教員が、「面倒くさい・負担が増えた」と思っている。おそらく、探究活動の指導経験がなく、新しい取り組みに対する不安があるのだと思う。「探究活動の指導法」を教員免許更新講習等で必修科目にするのはどうか。SSH指定校は、それなりに指導力のある教員が集められ予算もついているので、理科を中心に上手く活動していると思うが、指定されていない学校での実施は、教員が共通の認識を持つところからすでに困難である。また、実施するにおいて、回数だけでは説明できない

					い負担があるのは事実である。校時内の決められた時間に活動（指導）するが、その時間以外、場合によっては公務時間外の指導もあり得る。その負担をどのように解消するかの対策も必要だと思う。	
37	化学	50～59歳	商業科	21～15	19% 21	理科として探求活動の研修会には参加していませんが、商業科の職員は熱心に研修を行っているようです。今年4月に転勤してきたので商業高校の様子がよくわかりません。理科職員も私を含め2名で、普通教科としてどのように活動してよいか考察中です。探究活動については、商業高校では理系の探求活動実施は厳しい。
38	物理	60歳以上	普通科	21～15	79% 60%	研修として、ある程度生徒に例示できるテーマの例を幅広く持っておくことが大切かと思う。生徒に考えさせても、探究が非常に困難なテーマであったり、簡単に答えが出る問題であったりするので。日ごろからメモを取るなどして、収集しておこうと考えている。探究活動については、様々な事項の基本的な理解をベースに、探究に発展させることが大切で、いきなり探究設定するのは困難である。やはり、教科に組み込んで探究を行うことになるがそのためには時間に余裕がないのが現状である。
39	物理	60歳以上	普通科	29～22	90% 21	コンピテンシー評価、ルーブリック評価等の評価に関する研修を都などの管理機関が広く教員向けに実施し、教員の評価スキルや考え方の底上げが必要だと思います。探究活動については指導ではなく、相談・支援を如何にできるかが求められるところですので、各校でのリーダーが中心となって実践の中でノウハウを共有するOJTタイプがよいかと思います。

## 後記 私の感想

アンケートについて個人的な感想を最後に載せさせていただきます。まず、探究活動については実施されている状況が学校によってかなり異なっていること、先生方のそれぞれの関わる立場が異なっているため、個人の立場で答えるのか、教科の立場で答えるのか、学校として答えるのかかなり迷われた先生も多かったと思います。また、私自身がそのような個々の先生の立場を十分に反映したアンケートを作ることが出来なかったこともあり、来年度の探究活動の実態がしっかりと把握できなかつた点をまずお詫びしたいと思います。

しかし、多くの先生のご協力があり、かなりの程度は探究活動の実施状況が把握でき、先生方が探究活動に積極的に取り組もうとされている状況がわかったことが大きな成果だと思っています。改めて御礼申し上げます。その上でかなり個人的な意見なのですが、今後の探究活動についての考えを述べさせていただきます。

多くの生徒諸君や先生方と探究活動について交流している中で、私の中で一つの考えがまとまってきました。それは、探究活動の本質についてです。私自身ももともと探究活動は教科学習の内容を理解させるための補助的な教育手段だと考えていました。教科学習をしっかり行っていくための思考力や伝達力を養うことが探究活動の核だと思っていました。

しかし、多くの学校で課題研究に熱心に取り組んでいる生徒諸君の話を聞いているうちに、私の認識は違っているのではないかと感じるようになってきました。もし、補助的に思考力や伝達力をつけることが探究活動なら、その成果は、科学コンクールで賞を取ることや難関大学へ合格することがその最も大きな成果となり、探究活動として取り組む課題研究は何が何でも結果を出すことが優先されることとなります。勿論そのことも意味はあります。しかし、何か違うと感じました。たとえ課題研究で結果が出せなくても、**「課題研究の中で取り組んだ個々の生徒諸君がその取り組みのプロセス自体の中から学ぶもの」**。それこそが探究活動の本質ではないかということです。言い換えると、**探究活動それ自体が人材育成教育そのもの**なのだという考えです。

現在の探究活動の方向について懸念することは、補助的な手段だと考えている先生方が少なくないという状況にあることです。課題研究も結果を出させることが主な目的となり、成果を出す可能性が比較的高い大学等の研究機関への丸投げが課題研究だという認識が広がり、その一つの発展としての入試を前提とした高大接続が当たり前になってきています。しかし、それでは大学への準備としての学習活動に限定されてしまいます。そこからは大きな未来への探究活動は生まれてこず、未来の社会を支える人材を生み出すための教育としては不十分ではないかと考えます。

未来社会を作る人材育成は、探究への主体性そのものから生まれてくると 생각합니다。探究活動は、高大接続のみを目指すものでもなく、科学コンクールでの成果のみを目指すものでもない。たとえ結果が出せなくても、そのプロセスこそがたとえ失敗体験になっても重要なのです。そのようなプロセスが経験できる探究活動の場は、高校は勿論、大学にも創っていただきたい。そこから未来を担う人材が育成されると多くの先生方が確信しています。